重要無形文化財

色鍋島 今右衛門

[ 窯元 ]
〒844 - 0006
佐賀県西松浦郡有田町赤絵町 2 - 1 - 15
TEL 0955 - 42 - 3101

[ 東京店 ]
〒107 - 0062
東京都港区南青山 2 - 6 - 5
TEL 03 - 3401 - 3441

http://www.imaemon.co.jp

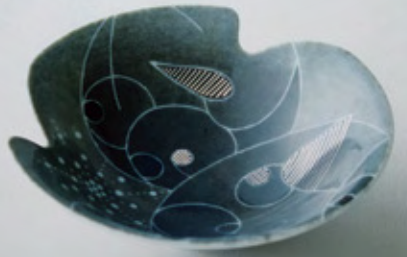
今右衛門

# 現代を生きる伝統の色絵磁器

「色鍋島」は、370年以上にわたり日本の磁器の最高峰に位置づけられ、世界的にも高い評価を得ています。
今右衛門は今日まで14代にわたって技術力を結集して、その伝統を受け継ぎ、積み上げてきました。今右衛門の磁器には、長い歴史を踏まえつつ、時代の価値観を反映して伝統に挑み続けてきた「現代の色鍋島」としての存在感があります。

## 墨はじきにあらわれる
## ものづくりの姿勢

十四代今泉今右衛門(人間国宝)は、江戸期からの技法「墨はじき」を、新たな発想で作品に用いました。
墨はじきとは、墨で描いた文様の上に染付をして焼くと、墨が焼き飛び、文様が白く抜き出される技法で、十四代今右衛門は、背景の地文様に使われていたこの技法を、デザインの主文様に使用し、これまでにない色鍋島の世界を表現しました。墨はじきによって手間をかけて白抜きをすることで、静かでやわらかい白が生み出されます。
あらゆる工程の見えにくい部分にまで、丁寧に時間をかけ、神経を使い、合理的であるより陰影や形の美しさを表現することに労力をかける―こうした技術や精神性が、今右衛門の磁器に至高の品格をもたらしているのです。



## はじまりは
## 将軍家への献上品

「色鍋島」の起源は、17世紀後半に佐賀藩主鍋島氏が、特別優れた技術を持つ陶工たちを集め、将軍家への献上品や他藩への贈答品、城内での調度品として使用するための最高級磁器を造らせたことにさかのぼります。
色鍋島は200年もの間、一般に流通することはなく、将軍や大名の嗜好にこたえ、藩の威信をかけて採算を度外視して製作されてきました。
当時、今右衛門は「赤絵付(釉薬の上から赤、黄、緑などの上絵具で描き、焼き付ける技法)」の工程を担っていましたが、廃藩置県により藩の保護を失った後は、赤絵付だけでなく、すべての製作工程を行う窯元となって伝統を継承してきました。そして現代でも、皇室で愛用され、国賓への贈答品に選ばれるなど、日本工芸を代表する特別な存在であり続けているのです。

## 職人による技の集結

今右衛門とは、重要無形文化財「色絵磁器」の保持者である十四代今泉今右衛門を当主とする職人の集団で、重要無形文化財「色鍋島」の保持団体に認定されています。

職人たちは江戸期からの伝統技術に基づき、土を練り、ろくろで形を作り、三度の焼成をしながら、下絵、釉薬、上絵と重ねていきます。この、いくつにも分かれる工程はそれぞれの職人が分業し、熟練の技術によって、すべて手仕事で仕上げられていきます。

また、赤絵具の調合については一子相伝の秘法として代々伝えられており、それぞれの時代を乗り越えながら、色鍋島の品格・格調を守ることを信念として、日々の製作に取り組んでいます。

# 未来につなげる伝統技術と誇り

1616年頃　現在の佐賀県有田町泉山で磁石(じせき)が発見され
日本で初めての磁器が焼かれる

1644年頃　色絵の技法が中国から有田に伝わり初代今右衛門が
赤絵付を始める

1672年　佐賀鍋島藩の御用赤絵屋となる

1873年　藩の保護を離れすべての製作工程を担う窯元となる

1934年　宮内省御用達に指定される

1958年　十二代今右衛門が宮内庁陛下謁見の間に飾る額皿を製作する

1971年　色鍋島技術保存会が重要無形文化財総合指定に認定される

1975年　十三代今右衛門を襲名

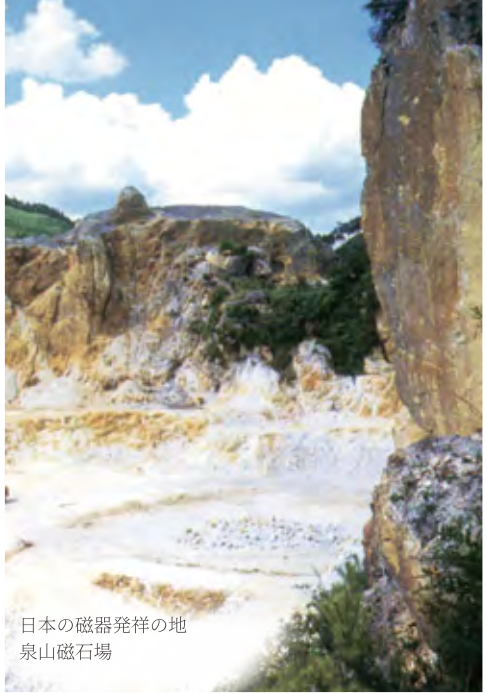
1989年　十三代今右衛門が重要無形文化財「色絵磁器」保持者(人間国宝)に
認定される

1996年　今右衛門古陶磁美術館を設立、一般に公開

2002年　十四代今右衛門を襲名

2014年　十四代今右衛門が重要無形文化財「色絵磁器」保持者(人間国宝)に
認定される

2016年　大英博物館にて特別展示「日本の磁器：鍋島と今右衛門」が
開催される

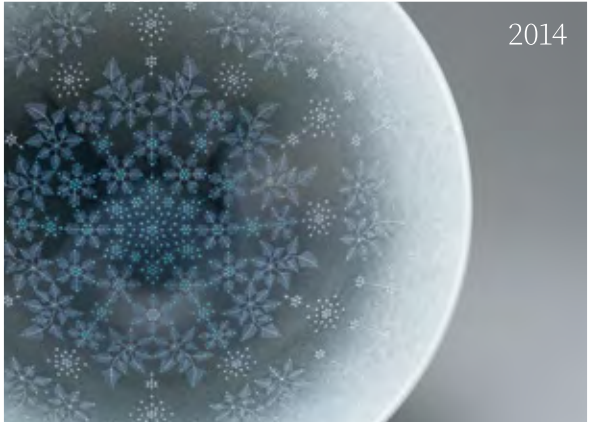

日本の磁器発祥の地
泉山磁石場

16世紀後半-
17世紀前半

1934

1958

1989


2014

松薪による本焼焼成